ユニバーサル段階における大学経営と「大学の評判」

濱　名　　篤（関西国際大学教授）

はじめに

本日の私の話は、「ユニバーサル段階における大学経営と大学の評判」とのテーマに沿って進めてまいりたいと思います。

この「大学の評判」というテーマですが、高等教育関係の研究会でお使いになられたのは、おそらくこれが初めてであろうかと思います。山本眞一・筑波大学大学研究センター長から「大学の評判」なるテーマで話をしてほしいとの要請があり、最初のうちは、私どもが文部省科学研究費補助金で研究している「ユニバーサル高等教育段階における大学の魅力の構造」についての発表を、日本高等教育学会で平成11年5月にいたしましたので、この内容中心で何とかなるかなと安易なことを考えてお引き受けしました。

しかし、これからお話する「大学の評判」というテーマを語る上で欠かせない、大学の教育・研究、さらには経営をめぐる環境はますます厳しくなり、あまり呑気なことばかり言っておられる状況でもありませんので、少し生々しい話などもおりまぜながらお話させていただきます。

私が勤務いたしております関西国際大学は開学2年目の新設校で、兵庫県三木という神戸市の北西に隣接する市の、大学としては交通の便のよくない、いわゆる足場の悪い立地条件の中に校舎を構えています。ベネッセ文教総研・主任研究員の足立寛さんのお話で言いますと、モラトリアム型の学生が他学部より目立つ、商経系の経営学部の単科大学ということになります。こうした条件の悪さの中で、厳格な成績評価としてGPA制度を導入して、退学勧告を1学年の2割に行ったおかげで、次年度は志願者が減少するのではないかという不安な状況の中で、必死に大学改革に取り組んでいる大学であります。

私自身の専門学問領域は、教育社会学、あるいは高等教育の研究ということもあり、他の講師の皆様とは、いろいろとデータの見方が少し違うかもしれませんし、そのような点でこのような研究会の報告者としてもお声がかかるのではないかと感じております。

1．受験生・大学生は「消費者」「評価者」としてどこまで成熟しているか
～大学関係者とのギャップ～

(1) 志望校選定理由に見る「大学の評判」の基準

改めて「大学の評判」というものを考えました時に、基本的な評価者として、私立大学の関係者が考えますのは、受験生、大学生ということになります。しかし、彼らが消費者、評価者として、果たしてどこまで成熟しているのかということを、まずは問いなおしていきたいと思います。

私はリクルートリサーチ取締役の大江淳良さんと同じ意見で、彼らが消費者、評価者たるに十分ふさわしいかというと、その意識・行動等をふまえてあまり当てにならない側面があると思っております。そう断言できないとしても、少なくとも大学関係者とのギャップはかなり大きいと考えております。

そのようなことを端的に示すデータとしては、私ども新設大学の側から言いますと、足立さんが使われたベネッセのデータは、進研模試で通信教育を受けるのは一定レベル以上の学力を持った学生であり、多くの大学の中にはそうした学生はわずかしか入学してこない例もあります。ユニバーサル化という状況の中で、今日指摘されている数々の大学をめぐる問題が推移しているということが言えるだけに、そのようなデータが必ずしもユニバーサル化の現実を全体的に捉えているものとは言えないであろうと考えます。

もう少し、ユニバーサル化が反映されたサンプルはないかと見ておりましたら、首都圏、京阪神、愛知県、広島県の学生マンション在住大学生を調査対象とする「大学生の進学動機と在籍校の満足度に関する調査」（学生情報センター　1999年3月）が目に付きました。経済力があって、大都市圏に集まってマンションに下宿できるような学生、おそらくユニバーサル化の動向を見ていく上ではベネッセ・データよりは適切な対象ではないかと考えました。調査の中で、現役大学生の志望校選定の理由を、ベネッセ・データと同じように、入学後に聞いております。具体的には、社会的評価の高さ、伝統、大都市部に立地、充実した施設・設備、推薦入学がある、就職に有利、学費が安い、校風に特色がある等についてです。

この種の調査は、ある特定のデータだけを見て分析・評価するという非常に危険なことをやっているのであろうと思います。同じ性格の対象者への継続的な調査の結果、その変化は見られるかもしれませんが、リクルートが実施した調査やベネッセが実施した調査と、この調査を少しずつつまみ食いして比較したら、とんでもない間違いをすることになるだろうと思います。

大学が改革に努力している、あるいは我々新設大学の人間がよい評判を取りたいとすると、まず何に力を入れるかと言いますと、当然のことながらよい教育をしようと考えるわけです。そのようなことをふまえて、資料①は教育に直結すると思われる志望校選定の理由を男女別、文系、理系に分けて集計したもので、線を引いたところあたりが、大学関係者から見ると受験生に評価してもらいたいところではないかと思います。どのような数値になっているかは、一目瞭然でご理解いただけるのではないかと思いますが、このデータだけではいかがわしいと思

われるといけませんので、②をみて頂きますと、リクルートの『カレッジマネジメント』でも同様の性格の調査を実施していて、大学生・短大生の現在の大学に対する満足度について、もう一度大学選択、あるいは短大選択をしなおすとすると、それらの項目をどの位重視するかという形式で聞いたものがあります。

いずれを見比べていただきましても、高校生を対象とする調査とは全く違う結果が出てきます。高校生に聞きますと、重視した情報として教育内容やシラバスという項目が出てはくるのですが、どの程度教育内容やシラバスの中味について受験生が情報を得ているのかと言いますと、ほとんど得ていないに等しい。面接試験を実施する大学ではよくおわかりのことかと思いますが、推薦で面接をするわけですから、当然本学についてこの程度のことは知っているだろうと思って聞きますと、ほとんど期待は裏切られます。具体的にどんな科目をとりたいかと聞いても、答えられる受験生はほとんどいないことがあります。本当に教育内容やシラバスの中味を十分わかった上で受験校選択をしているのかというととても疑問で、受験生に質問しても、あくまで建前として教育内容やシラバスに関心を持って選択したと、高校生が答えているのであると理解しておいた方がよいのかもしれません。

そうであるのならば、むしろ、だれが設問を設定して、だれに対して聞いているかによっては、大学にすでに入学している学生の方が、調査に対するガードがだんだんとれて本音が見えやすいのではないでしょうか。私がこのデータを見て注目したのはそうした点で、むしろこの種のデータの方が本日のテーマを語るには適切ではないかと思ったからです。

1) 有名・大都市圏・伝統(総合)大学の固定化した優位性

この調査を見ていきますと、有名校かつ大都市圏にある伝統校で、おそらくは総合大学であることが、志望校選定の理由として有利な反応としていつも固定的に表れてくるとになります。例えば、①にある社会的評価が高い。これがくせ者で、何が社会的評価かというのは、評判と同じ位怪しい概念です。伝統ということでは、昔からある大学で、大都市圏に立地している。そういう学校というのは、大きい大学で総合大学化していますので、施設・設備も学生1人当たりの単位で見ていくとよくわからないのですが、そうしたことと関係なく見る分には立派に思えるものなのです。そのような大学で、なおかつ推薦があればという話になってきますと、いったんこうした優位なポジションについた大学は、かなり安定した強みを発揮できるという評価傾向が、データから読み取れます。

さらに言えば、大学にすでに入学している学生の間からは、例えば、就職や社会的評価がどうなのかという意見はありましたが、受験生はあまりそういうところは見ていないことが、このデータから明らかに出ていると思います。

受験生が、就職や学費よりも社会的評価や伝統といったところに引っ張られるというのは、なぜなのか。前者のような手段性を大学に求めるよりも、後者の象徴的なイメージに基づいて受験生は大学選びをしている。ある意味で、この象徴的な側面こそ「学歴主義」という言葉と近いのかもしれません。そう考えますと、ますます固定化した大学のイメージは崩れにくいと言えます。

それに拍車をかけつつあるのが、入試内容の規定力の低下ということであると思います。例えば、以前と比べて入試のパターンが細分化しています。現段階で中位校以下、もう間もなくすると8割の大学は偏差値ランク序列と直接結びつかなくなってしまいます。特に、社会的評価や伝統という象徴性がそこそこあった大学に、何とか入試でもぐり込めるチャンスがあるということになりますと、ますます偏差値や入試内容が、あまり問題とされなくなっていく。むしろ、そのような象徴性に受験生が引っ張られていくことに拍車がかかるという状況になるのかもしれません。

2)「教育内容・方法」に対する関心の低さ

次に指摘できるのが、教育内容や方法に対する関心の低さです。リクルートのデータで高等学校の教員や大学の教員が何を重視しているか、ということを見ていただき、受験生と比較していただけばその差の乖離は一目瞭然です。つまり、受験生は高等学校の教員や大学の教員が重視している教育内容や教授陣等はろくに見ていないということです。これは、現実の大学教育が教育内容や方法で、全く満足を与えていないことの裏返しの結果かもしれません。

私どもの大学などは、改革のカンフル剤を打ち続けるような努力を常にしていないと生き残れないという危機意識がありますが、そうした動きが受験生の意識に影響を与えるようになってくると、変化がもっと顕在化してくるかもしれません。

3) 手段性イメージの根強い？　男子、女子に見られる「教育」への関心の萌芽？

そのような受験生の状況がある一方で、現在すでに大学生である人たちの意識やマインドを照らし合わせてみると、どのようなことが言えるのでしょうか。

男子学生と女子学生の比較をしてみますと、男子学生の場合は、就職について比較的まだ切実さがあり、大学の手段性イメージを追い求めている感じがします。女子学生は、かなり大学の象徴的イメージに引っ張られていますが、教育に対する関心は、男子学生より多少成熟した部分があるのが、このデータから読みとれるかもしれません。

(2) 大学生フォーカスグループインタビュー結果から見た「現実の大学」「理想の大学」

今度は自前で実施した大学生のフォーカスグループインタビュー調査のデータに基づく分析結果から、話題に関連する部分をご紹介しましょう。

ここで取り上げている関西地区の大学生のうち、偏差値上位校というのは、関関同立クラスの大学です。偏差値下位校というのは、オープン・アドミッションではないもののそれにかなり近い大学になります。

心理学、社会学系の学部、学科に所属している3年生と1年生の学生を共同研究者のコネクションで集めました。そして消費者心理を専門とする心理学者をチーフに、文部省科学研究費補助金による共同研究の一環として、大学生が何のために大学に入学してきたのかと、そして、実際の大学をどう見ているのか、大学の魅力をどのように捉えているのか等について、フォーカスグループインタビューという手法により分析しました。1グループ6人程度とし、各グルー

プ3時間位かけて質問した模様をビデオで記録しました。そして、後に会話分析を行ってまとめましたのが、この調査結果の概要です。

この調査は質問肢項目で○印をつけさせる調査とは全く違います。ある意味では、その調査が繰り広げられる模様を観察する中で、学生の現状をいろいろと推論していただく材料が出てくることになります。⑥にあります実施結果からみますと「大学に何をしに来たの？」という質問に対して、明確な理由があって入学してきている大学生というのは、その大学を比較的第一志望とか、上位の志望で入ってきている学生たちを含めてそれほど見当たらず、はっきり言って明確な目的意識を持って入学してきていない学生が多数であると言えますし、おおよそ大学生の意識などはこうした状態であるわけです。

1) 大学に対する肯定的イメージは施設・設備、人間関係（友人・サークル）

現在の大学について持っている意見を、第三者が話を聞く形で学生たちにブレインストーミングをしてもらいました。「今の大学についてどう思いますか？」という話題の中で、大学のよいところと悪いところを言ってもらい、後で学生たち自身で出てきた要因のグルーピング作業を行ってまとめました。（⑦参照）

Aグループが、偏差値上位校の3年生です。Bグループが偏差値上位校の1年生、Cグループが偏差値下位校の3年生のインタビュー結果です。それぞれの大学で違いがわかりますが、一方で共通する側面も読み取ることができます。結果を見ていきますと、肯定的イメージが多いのは、人間関係と施設・設備関係で、これらにほとんど集約されてしまうわけです。つまり、友達関係とかサークル活動で満足感が得られ、施設・設備の充実している大学がよい大学であるという認識しか持たれていないことです。

2) 大学に対する不満の原因は施設・設備、立地・通学の便、授業

次に、⑦のうち不満を示す黒丸を見ていきます。どういう点に問題点があるのか言い換えれば、学生は大学の現状にどのような不満を持っているのかと言いますと、施設・設備に不満があると、アッという間に不満感が高まっていきます。一番の不満は立地、通学の便ですが、これは決して立地、通学の不便な大学ばかりに向けられたものではありません。関西地区の私立大学で言えば、関関同立クラスの大学というのは、立地面では比較的恵まれている大学のはずなのですが、そういうところでも必ずクレームが出てきます。

そして、もう一つは、授業についてで、これに対する不満が非常に出てきやすいということが言えます。

3) 偏差値下位校ほど大学に対する不満が強い

特に、この三つ目のポイントは、ベネッセの足立さんが示すデータとは少し違っていて、それは偏差値下位校ほど大学に対する不満が強いということを反映したものと思われるものです。もう少しわかりやすく言い換えれば、偏差値下位校に来る学生というのは、同じ事象であっても非常に不満な解釈を加えやすいということです。つまり、本意入学が少ない、あるいは成功体験が乏しい学生たちから見れば、同じ条件であったとしても非常に不満を持ちやすいということです。

その不満の内容も、A、Bのグループでは出てこないようなことが多いわけです。それも教育の場であるとか、大学の場であるから出でくる特殊な問題ではないのです。日常生活を過ごしていくあらゆる場面で感じるであろう不満というのを、非常に感じやすいのが偏差値下位校の学生たちに強くみられる特徴であると仮説的には考えています。

私どもも、このフォーカスグループインタビュー調査だけで物事を言うことの危険性は十分承知しております。平成１１年度は、文部省科学研究費補助金による大学の魅力の構造についての研究の２年目の年度になりますので、質問紙調査を実施し、その結果をさらに分析して研究を進めていこうと考えております。

4) 「理想の大学」とは、〔施設・設備＋ゆとり＋人間関係〕＋魅力ある授業

それでは今の大学生が捉える理想の大学像とはどのようなものなのでしょうか。

調査では、「理想の大学を考えるとしたらどういう条件が含まれていればよいと思う？」との質問をしまして、該当する項目を選ばせた上で、その重要性を星印で表現しました。そうしたところ、三つ星とか二つ星の多い項目というのは、学生たちが理想の大学の条件を考えていく上で重視するものなのですが、結果的には施設・設備と人間関係・交流、進学目的といった項目があがってきます。

それらのほとんどは、「時間的ゆとり」「人間的余裕」につながると言えるものなのですが、教育内容、授業については、そのどれよりもはるかにステータスは下になっている。立地条件の方がまだ上にあるという状態です。つまりは、施設・設備がよくて、友人関係やサークル等が満喫できて、「時間的ゆとり」「人間的余裕」を享受できればいい。さらには、プラスアルファで、魅力ある講義があればいい、ということが「理想の大学」になっている。現実の授業への不満の裏返しかもしれませんが、これが現状です。

5) 学生にとっては、大学もデパートや役所等と同じ場の一つにしか過ぎない？

私どもの研究においてこの大学生調査の担当チーフである共同研究者の西道実は、「(マス段階、あるいはエリート段階までは) 大学と社会は異なる世界として対峙し、個人(学生)はその二つの世界を行き来する存在であったと思われる。しかしながら、ユニバーサル化の進行下にある現在、この構図は大きく変化し、学生にとっての大学は社会の中の一つの居場所に過ぎないのではないだろうか」(「ユニバーサル高等教育段階における大学の魅力要因の探索的検討」関西国際大学高等教育研究所・高等教育研究叢書1999) と考察しています。

つまり、学生にとって大学と実社会とは、従来は大学というアカデミックな世界と実社会というプラグマティックな世界とが対峙するような関係であったのが、今の大学生個人から見れば、大学はもはや実社会と切り離された特別な世界ではなく、会社とか友人やサークル、ファッションの場と同じ生活空間の一つにしか過ぎない、と分析しています。端的に言えば、大学もデパートや市役所、映画館等と同じ社会生活の場の選択肢の一つということになります。

(3) 大学関係者の努力・認識とはまだまだ距離のある？
"未成熟な消費者" としての受験生・学生

次に偏差値下位校の学生が大学のどのような点に不満を持つのかを見てみます。職員の対応が高飛車であるとかについて学生が不満を持つことは、体育会出身の職員が多い伝統校にはありそうな話なのですが、新設であるとか偏差値下位校に、体育会出身のOBが特に多くいるわけではありません。しかし、そうした大学の学生ほど、スチューデント・コンシューマーリズムの意識が強いようです。同じ大学生であっても、「大学とはそのようなものだ」という納得をしてもらえないし、市役所や映画館の受付と同じ感覚で学生が職員を見ていれば、非常にシビアな評価結果になってしまうのです。

彼らの意識とすれば、大学が決して「特別な場」であるとは思っていない。そうであるとするなら、消費者、評価者としての彼らは、ある意味ではおそろしい存在であると言えるのかもしれません。大学関係者の努力や認識とはまだまだ距離のある、ある意味では未成熟なある意味では異なるタイプの消費者としての受験生や学生――こういう見方をしておく必要があるのではないでしょうか。

1) 「大学の評判」の追求は、大学の教育・研究の改善と直結していると言えるか

「大学の評判」という概念については、後ほど少し考えてみたいと思いますが、そもそも大学の評判を追求していくことが、大学の教育や研究の改善と直結していると言えるのでしょうか。現状から考えると必ずしも直結しているとは言えない。では、教育や研究の改善をいくら追求しても意味がないということを言うわけではありません。ただし、その関係は、それほど簡単なものではなく、よい教育、研究を行えばそのまま大学に対する評価が高まっていくという、単純な図式では動いてはいないということであろうと思います。

特に昨今は、非常に口コミによって受験生の進学動向が左右されるようになってきているのが特徴であると思います。もはや大衆でも階級、階層でもなくて、"個" として動く受験生たちの進学動向を見過ごすことはできません。そして、そのような彼らの意志を左右する "意味のある他者" というと、依然高等学校の教員や、受験生の保護者ということになるのです。

2) 受験生に対する高校教員や保護者（特に母親）の「大学の評判」への認識と影響力

いろいろなデータを見ていきますと、多様な情報源を利用することはありますが、少なくとも友人と相談して大学を決める受験生は多くいません。相談するとなると、やはり高等学校の教員や保護者ということになります。しかし、高等学校の教員というのも、私どもから見ると、日常的な業務に追われ、大学がどのように変わっているかを正確に理解しているとは実感しにくいわけです。

例えば、高等学校教員向けに入試の説明会を開きますと、参加者がペンを持つのは、入試方法や日程のところで、それまでの話はただ聞いている。残念ながら入試に関わる情報のフォーマット化されたシートを埋めるためにのみ、一生懸命メモをとるという先生もいるのが現状です。

高等学校の教員がおかれている全体状況はこれでもまだよい方で、少なくとも受験産業から大学に関わるかなりの情報が提供されている。受験産業は情報量の多さといった点からは、はるかに先を行っていますし、高等学校の教員もそれを情報源としています。

ところが、文部省の科学研究費補助金による研究で、受験産業にインタビューして問題を感じたのが、母親に対する大学情報の提供が一番遅れているということでした。受験産業を取材に回っても、母親向けの受験媒体なるものはほとんど存在しませんでした。母親たちの情報源は何かといいますと、『サンデー毎日』の大学のランキング表なのです。この『サンデー毎日』は、サラリーマンが家に持って帰れる品位の週刊誌の"境界線"であるとのことで、高校別入学者であるとか、就職等に関するランキングが掲載されています。このデータを今だに信奉しているのが母親であり、この母親層が一番大学側から発信する情報をコントロールしにくい対象だそうです。受験産業でいろいろお話を伺ったのですが、学歴主義信仰をいまだに最も根強く持っているのは母親であるというのが、そこでの定説でした。それだけに、母親たちを変に啓蒙してやろうという意識は受験産業にもあまりないようです。

3) 評価者・消費者としての受験生に対する大学情報のディスクロージャーの不足・下手さが原因

そうした状況ですので、これは大変やっかいです。このような関係性をふまえ、受験生への啓蒙を怠ってきたツケは誰が責任を負うべきなのかと言いますと、間違いなく大学関係者ということになります。

大学の情報のディスクロージャーの不足と下手さを証明するために、私どもは、ある大学の発信する情報を定点観測しましたが、本当に変わっていないです。受験雑誌の紹介ページに10年たっても同じ写真が出てくる学校がいくらでもあります。そのような状況の中で、A4で2枚程度の誌面情報で、大学の何が受験生にわかるというのでしょうか。

一方で、今度は、分厚い大学案内パンフレットの制作を競い合うようなこともしている。一大学のパンフレットが80ページもあるものを、誰が一体読んでくれるというのでしょうか。また、字が多いと読まないということで、内容はコンピュータ・グラフィックス等で構成したイメージ中心のものとなったりする。

近年まで大学は、受験生が受験校選択にあたって、段階に応じた情報提供といったことを全く行ってきませんでしたし、さらに言えば、そのような状況にあぐらをかくことを可能にしてきた、偏差値という一元尺度があったわけです。これが今や大学の首を絞める一つの要因になっています。偏差値という一元的な尺度があって、筑波大学などは、その上位の方になるわけですから、安泰という形でこれまでこれたというところがあるのかもしれません。

3．受験産業の"大学"情報の質的変化（90年代後半以降）

そういう点では、受験生や学生に対して情報開示、あるいは消費者教育をしてこなかったということを、大学側が責められても仕方がないと思いますし、実は受験産業にとっても同じことがいえるかと思います。しかし受験産業は、一足先にすでに偏差値全面依存からの撤退準備を始め

ていたわけです。

皆さんはお気づきになりましたでしょうか。ベネッセの足立さんがお話の中で「通信添削教育の受講者は今後どんどん減ることになるでしょう」とこの場で涼しい顔で言えるのは、ベネッセは次の段階に対する準備が終わっているからなのであって、崩れた偏差値体制に取り残された大学は、いまだそこまでの準備ができていないという状況だと言えるのかもしれません。

こうして消費者、評価者としての受験生、あるいは大学生に対する情報の伝達、あるいは啓蒙が非常に不十分な状態を考えた時に、受験産業ではいかに対応しようとしているのかその意識と動向に着目して、私共は研究をしてきたのでもありますが、その説明にあたって現状を改めて認識しておく必要があるかと思います。

(1) 入試・受験情報の重要性の相対的低下

1) 「どこかに入学できる」――入試の易化・倍率低下による偏差値の有効性低減

現状としては、偏差値を中心としていた入試、受験情報の重要性が総体的に低下してしまったということが上げられます。つまり誰も大学に落ちなければ偏差値というのは何の根拠でついているのかわからないわけで、その象徴的な出来事として昨年、旺文社が短期大学の偏差値を出すのを止めています。

私どもの短期大学部は、定員割れを起こしたその年に偏差値が上昇しました。データの入力ミスか、あるいは間違って回答した人間が多かったのかわかりませんが、理由なく偏差値が上がったり、下がったりすることが起きているわけです。そういう状態になってきますと、高等学校側においても次の対応の準備を始めるようになってきます。

高等学校側では、生徒はいずれかの大学には入学できるということを、完全に読み切っていると言います。例えば、ある県に行った広報担当者が地元の商経系大学の近くにある私立高校を訪問したところ、進路指導担当者が前年から状況が変わりましたと言うそうです。その高等学校では習熟度別に５クラスあって、従来は１番上のクラスの生徒をＡ大学に指定校推薦で送っていたというのですが、その年の一般入試になると、商経系は不人気学部で１番下のクラスでも合格できたというのです。そうなると、もう今年度からは指定校推薦では送りませんということだそうです。

ましてや定員が一端割れると、この大学は駄目であるという評価・評判になるそうです。これが大変なことで、どこかしら大学に入学できるとなりますと、高等学校側では進路指導、三者面談を、偏差値の上位ランク校といわれる高等学校に行けば行くほど７月には行わないのだそうです。理由は、９月まで三者面談を伸ばして、夏休み前の生徒に甘い期待を持たせない方が、夏休み中勉強してくれるという生徒指導上のテクニックからだとも言われますが、高等学校にまさしく大学が見切られている状態になっているということであろうかと思います。

2) 多様化しすぎた入試方法に対応した情報消化の難しさ

元はと言えば誰が悪かったのかというと、やはり、大学が悪かったと反省せざるをえま

せん。いろいろなことが関西圏の大学から起こってきていますが、入試制度の多様化もその一つで、これは90年代の前半に起こった現象でした。入試方法があまりにも多様化して偏差値がほとんどあてにならない状態になってきたことの帰結なのかもしれませんし、その時点で受験産業も大学も高等学校も、偏差値中心主義を捨てる決断をすべきだったのかもしれません。ところがそれをせず、偏差値がまだ通用するということで、問題を先送りして、今日の深刻な状況をつくり出したのかもしれません。

(2) "大学" 情報の多様化

1) 情報発信としての就職、資格、学科・コースまでの教育内容・進路等の浮上

受験産業では、こうした偏差値尺度の信用度の総体的低下に対応して、大学情報の多様化を押し進めています。就職や資格のみならず、学科あるいは履修コースの内容を含めて、明らかに大学が提供するよりもはるかに細やかな情報提供をしています。具体的には、こういう仕事に就きたいのなら、こうした能力が必要であって、そのためにはどのような学科・コースがあるかといった情報です。考えてみますと、大学関係者ですら、例えば、自分たちの学部学科と競合する他大学の同系学部学科のカリキュラムを比較、研究するのは新増設申請の際ぐらいでしょう。真剣に毎年比較している大学はそう多くない思います。

そうしますと、自分たちと競合する他大学の同系学部学科が、どのような教育を目標とする人に合っているのかということを、実は大学関係者からはきちんと発信できていないわけです。

2) ナビゲーション型へ進む "目の細かい多様化"

そこを受験産業がフォローアップしようとする。さらに言えば、一歩進めて、個人に合った、その人の進路に最もふさわしいのは、どういう経路で学部を選び、学科を選び、大学を選ぶのか、そういうナビゲーション型の情報提供に受験産業が着手しようとしていると言えます。極端なことを言えば、これが進めば高等学校の進路指導不要、模擬テスト不要という状況にまでなってきます。そうなれば、受験産業はサバイブできるわけです。

そのように考えていくと、はるかに受験産業の方が分析的に受験生の変化であるとか、大学の世界の動きを捉えることができているのかもしれません。

我々大学関係者はどうかと言いますと、評価や評判に恐れおののいているというのが現状ではないかと思います。

4.「大学の評判」の重要性と曖昧性

(1) 誰にとっての「大学の評判」？

「大学の評判」という題を頂戴して、私なりにいろいろと考えました。リクルートリサーチの大江さんのレジメにも「評判」という言葉の定義が出ておりましたが、おそらく評判というものを考えた場合に、誰にとっての、そして何についての大学の評判なのか、というこの問題

の重要性や曖昧性といったことが、そこには隠されているのでしょう。

例えば、講師の皆さん方が誰からの評判を意識して本日お話なされたのか。それが受験生なのか、保護者なのか、高等学校の教員なのか、予備校、受験産業なのか。または企業なのか、大学教員あるいは大学経営者なのか。あるいは文部省からの評判を意識してなのか、マスコミや、一般世論を意識しての評判なのか、高等教育研究者から見た評判なのか一様ではありません。

つまり、評判の評価者が誰であるのかということに対する文脈は、まさしく多種多様で、共通性が全くないわけです。

ただ、これが企業の評価にしても、文部省の評価にしても、あるいはマスコミの評価であったとしても、私立大学にとってみれば、最終的には受験生に大学の魅力を評価されないと、大学は存続不可能であるということです。これは結局、就職がよいという企業の評価を受けて、受験生が来てくれるという状態に大学がならないと困る。私立大学は基本的に、何よりも学生からの学納金に依存しているわけで、学納金が入ってこなければ、それでおしまいということになってしまいます。

(2) 何についての「大学の評判」？

将来は、筑波大学でもそのようなことを気になさる時期が来るのかもしれませんが、大学にとっての評判とは何についてなのか。その言い方も、「よい大学」、「評判のよい大学」、「人気の大学」、「一流の大学」、「実力のつく大学」、「魅力的な大学」等々、いろいろとありますが、どれが一番のほめ言葉なのかわかりません。

さらに、その尺度は、入試の難易度なのか、教育内容、あるいはその成果としての学生の実力なのか。教育方法や学習支援がしっかりしているという教育に対するケアが行き届いた教育熱心な大学であるかどうかになるのか。教員の研究能力、あるいは知名度の高さで競われるのか。

また、施設・設備に対する評判も様々で、食堂が立派な大学というのもそれなりに評価されるわけです。少なくとも会議室のシャンデリアが立派であるよりは、食堂が立派な方が、学生から見れば評価がよいわけです。さらに、キャンパスの立地条件についてもキャンパスが広い、狭いというだけではなさそうです。とりわけ、立地条件がよいのに学生が来ない大学は、これは致命的です。

私どもが調査・研究でいろいろな大学を回っておりますと、B大学は非常に偏差値が上がっており、立派な大学であると評価されていると受験産業の方からうかがうわけです。しかし、それは必ずしもよい教育を行っているから偏差値が上がっているわけではありませんと、その受験産業の方に断言したことがあります。

B大学は、学費が安くて、立地のよい首都圏の某大学ですが、キャンパスは狭い。あまり表面には出できませんが、学生サービス、あるいは奨学金を豊富に用意できるといった面もあります。しかし、B大学の学生生活実態調査結果から見て、必ずしも教育への満足度自体は高い

とは言えない。

学費一つとっても、それをストレートに援助することが、受験生にとって魅力となりうるのか、どうかということになってきます。学費の値下げは、確かにマスコミ記事には上がっていません。一部で値下げをした大学はありますが、値下げしても受験は一回限りですから相対的な当該年度間での他大学との比較になります。

ところが、各大学ではすでに奨学金を出すという形での値下げを実施していて、一番おおっぴらに行われているのは留学生に対する奨学金で、奨学金という形はとっていますが、実質的な値下げなわけです。

就職実績、研究実績などに関する評判というものもあるのですが、よくよく考えていきますと、評判というものの尺度がはっきりしないのです。特に評価と異なって、評判というのは形がありません。このいかがわしさというか、曖昧性――さりとてこれが非常に気になるわけです。

評判というのは、一人が一人に悪口を言うと5倍、10倍となって返ってくるかもしれませんし、根拠がはっきりしない分だけ始末に終えない。例えば、学生が何か不祥事を起こす、あるいは女子大学でセクシャルハラスメント・ネタが出てくると、大学が非常に気にするのは当然なのです。その意味で評判というのは、ある意味ではおそろしい重要性を持っているわけです。

(3) 「第三者評価」と「大学の評判」の異同

1) 資源配分（補助金・研究費、寄附金、学費収入）に直結する？という共通性

考えてみますと、第三者評価と大学の評判の比較をしてみる必要があります。共通する部分は、まだはっきりしませんが、現段階であえて言うとするならば、資源配分に直結することであろうと思います。

例えば、第三者評価によって大学に対する補助金や研究費、あるいは寄附金が変わってくる可能性があるから、それが気になるのも当然であろうと思います。そうでなければ評価されることの大嫌いな大学人が、外部から人を迎えて第三者評価を行わなければならないなどという話になってくるわけがありませんし、普及するはずもないわけです。何らかのインセンティブがないとやるはずがありませんから。

2) 評価者に対するアカウンタビリティの有無と主観性許容の有無

一方、評判がよければ学費収入も増えますから、資源と結びついているという点では評価も評判も共通性がある。次に違いとなると評価者に対するアカウンタビリティの有無と、その主観性許容の有無ということがあげられます。これは明らかに違うわけで、第三者評価は誰が評価したかが問われ、評価者自身が批判にさらされることもあります。第三者評価をおやりになる方は、極力、客観性を担保しながら評価しようと努力をなさるはずなのです。ところが、評判を立てる人は、悪口をいくら言ってもよいわけで、誰が言ったのかわかりませんし、何を基準に言っているのかもわかりません。例えば、「あの大学は……」と高等教

育の有識者がひとこと言うと、皆さんが納得されるところがあるわけです。これが評判の恐いところであろうと思います。

3) 評価尺度の客観性の必要性の違い

さらに言えば、評価尺度の客観性の必要性の違いということであろうと思います。少なくとも評判、特に学生、あるいは受験生の方は、ベネッセが一時タッチされておられた『大学ランキング』とか、河合塾が編集に関わられていた『日本の大学』というものがありますが、これらの受験産業界での位置づけと評価ははっきりしています。これらのものを見て、受験生は大学を選んではいないし、購読者でもないと、編集者自身が認めます。一番の読者は卒業生であって、自分の母校を一生懸命見ている。それとともに、大学の教員や職員が一生懸命見ている。つまり、客観的な尺度を持った評価者や評価というものがあって、受験生や大学生に読まれているのかと言いますと、そうではないのであろうと思います。その読み方は極めて主観的なものであって、その危うさとおそろしさたるや大変なものと言えます。

そう考えますと、自業自得なのかもしれませんが、大学生は評価者としての自覚すら持っていません。これは極端な例かもしれませんが、友だちと携帯電話で話していて、「お前の大学はまだ試験やってるの。遅いな、最悪だね」といったことを言われると、自分の大学は「最悪だ」と思うわけです。携帯電話での会話の内容で、自分たちの大学の評価に対する判断が左右されるような、いわば基準を持っていない人たち、ある意味で未成熟な評価者、消費者なのです。時期あるいは文脈によって途端にガラっと変わる、それほど評判における評価というのは不安定なのかもしれません。

例えば、私どもの大学はGPAによる成績評価制度を導入しており、成績によっては学生は退学勧告を受けることもあり得るのですが、例えば就職の時に、そうした厳しいハードルを越えてきたということで、「よい大学へ行ったね」と言われれば、GPAによる成績評価制度に対する彼らの評価が仮にマイナスであったとしてもプラスに逆転するかもしれないわけで、それだけ不安定であると言えます。したがって、主観的な評価にうろたえる大学は、はたから実にみっともないというふうに見られてもしょうがないのかもしれません。

5．“大学（教育機関としての全体像）の評判”自体の危機

(1) 受験生数の減少による私立大学の“パニック”“集団ヒステリック状態”

1) 一人当たりの受験校数3.0校、受験倍率前年比－9.8％減の現状からくる“危機感”からの過剰反応

ところが、意外と見過ごされているのは、大学の評価や評判というと、個別大学の問題であると大学人は考えてしまうところかもしれませんが、むしろ、「大学」という教育機関全体の評判の危機の方が、もっと恐いことではないかと思います。

それを表す一つの例として、受験生の減少にともなう異常なパニックの問題です。数字を上げて説明しますと、一人当たりの受験校数が平成11年度入試で3.0校、受験生数が10％

程度の減少と思います。その状態に対して、平成12年度入試は、さらに学生が減少するのではないかという危機感からの過剰反応が大学側に起きているようです。特に、入試や広報担当者のパニックたるやすごいものがあります。

2) コンセンサスのない“ＡＯ入試”

そこで大学としての手だてとしてAO入試が注目され、ブームとなるであろうとベネッセの足立さんは言われましたが、私は本当に普及するかどうかもあやしいし、細かく分析をされればとんでもない結果が出る状態にしかならないであろうとも思います。

平成10年に、大学入試センターのAO入試をめぐるシンポジウムに呼ばれて、パネリストとして参加しました。シンポジウムの前に、一生懸命AO入試について調査したのですが、現在各大学で実施されているAO入試の共通点や、他の入試と比べてAO入試の定義とするのにふさわしい特徴となるものがないのです。唯一、職員が選考にタッチして面接を必ず入れているということ、そして、早い時期から選考を開始している――その程度しかありません。

AO入試はアメリカから輸入したものと言いながら、日本のAO入試は全然別物なのです。アメリカの場合は、一定水準の入学者の量を確保するための方法であるというのが、大学入試センター研究開発部教授の荒井克弘先生の出された結論であったと思います。ところが、日本の場合は、最初に導入したのが慶応義塾大学であり、その後同志社大学などが続いたので別の意味合いを持つに至ったのであると思います。これらの大学で実施されているのは、優秀学生獲得機能としてのAO入試なのです。高等学校関係者から言わせると、大量な資料を提出しても面接もしてもらえないで不合格になるケースがあるということです。AO入試が高等学校関係者から敬遠されるのは、そのような経緯からなのかもしれません。

ところが、一方で、短期大学の世界から始まったタイプのAO入試は、適格者選考としてのAO入試なのです。こちらの方がアメリカ型に発想は近く、対話を進める中で合格した後も、目標を持って読書をしなさい、成績を下げないようにしなさいとか、教育的配慮を入れる余地、入学準備促進機能のようなものを持たせ、何とか入試を接続手段として正当化させていくのです。実のところは、AO入試と呼ばれる選抜方法の中味についてのコンセンサスすらない状態です。

それをまた国立が導入する――慶応、同志社型の優秀学生獲得機能としてなのか、短期大学型の適格者選考機能としてなのか、国立大学がどちらの意図でAO入試を導入されるのか、独立行政法人化に向けてのステップだと言われれば、それは納得しますが、現状から言うと私には狙いが正直言ってわかりません。

これからはAO入試の時代であると言われると、みんなAO入試だと同じ方向を向くわけです。特に、受験生が減少しながら、オープン・アドミッションであるとは言いたくない女子大学は非常にAO入試を意識されているのではないかと思います。

3) 関西圏の商経系私立大学から始まった“指定校推薦ばらまき競争”

そのような動きであればよいのですが、もっと恐いのは、関西圏の商経系私立大学におい

て、平成12年度入試から指定校推薦枠のばらまき競争が始まっているという動きです。評定平均値の基準もなしで一つの高等学校に対して4人分でも5人分でも、という具合に指定校推薦をばらまいている大学があるという話です。

私どもも、評点平均値を付けていたのですが、「これでは受験生が来ませんよ」と入試担当者から言われるわけです。ある高等学校によれば、もらっている指定校推薦のおよそ8割という大量の枠は評定平均値の基準がないわけです。つまり、高等学校長の推薦状という“のし”が付いてくると、大学は喜んでいただきますという話なのです。

これは、受験生の減少から始まったちょっとしたパニックであると思います。受験生の数が減少すれば各大学の受験生数が減少します。さらに入試が簡単になって、一人当たりの受験校数が減れば、各大学の受験者数も一層減少する。これは、ごくごく当たり前の論理的帰結にもかかわらずパニックを起こしている。

定員規模が大きいために大人数授業が多く経営効率がよい一方で、モラトリアム層が一番進学している商経系で、そのような状況になっているわけです。それがどのような事態を招くのかと言いますと、数年前に短期大学で起こったことが、4年制大学で現在起こり始めているのであるという気がしてなりません。

4)「1.01倍」でも市場が成立している高等学校入試と自大学の受験倍率に振り回される大学入試

受験生が減っても平成21（2009）年度になれば、どの大学もオープン・アドミッションになると頭でもわかっているにもかかわらず、今その状態になると大変であるという話なのです。5倍あった倍率が3倍に下がったから大変だ、ということで、自分の大学のことだけをお考えになり、指定校推薦をばらまくというパニック状態なのであろうと思います。短期大学の場合は、その結果、市場自体が崩壊し、ほとんどオープン・アドミッションのような状態になってしまった。平成11年度のデータは未だわかりませんが、日本中の短期大学の半分程度は実質的にそれに近づいている、あるいはそうした状態をすでに迎えているのかもしれません。

ところが、考えてみますと、今起こっているようなユニバーサル化の現象というのは、高校ではすでに経験済みのことなのです。どうして大学関係者は高等学校を見ないのでしょうか。高等学校の方がそういう点ではタクティクスに長けているということであろうと思います。

例えば、1.01倍の倍率でも高等学校はあわてない。市場は一応成立しているわけです。それに比べると、自分の大学の受験倍率だけに振り回される大学入試というのは、考えてみますと、今だに受験生数とか受験倍率を見て一喜一憂している。むしろ、歩留率とか入学率の方が問題ではないでしょうか。つまり、先ほどもご紹介しましたが、受験生が3.0校受験するということは、33パーセントの歩留率が平均値、それより高い大学は魅力のある大学で、10パーセントしかない大学はいずれ駄目になるというだけの話なのだろうと思います。つまり、そのことに対する尺度変更の発想転換ができていないことこそ、大学の大きな問題な

のです。受験料収入というものを、常に追いかけているからかもしれません。

私学振興助成法が成立した頃、国立大学の給与を目標に追いつけ追い越せとやっきになっていた大手私立大学では、補助金を全部教員給与に還元してしまった、という笑えない話があるそうです。

受験料収入というのは非常にパブリーなもので、受験生が増えたのでそれに応じて手当ても増やすなどということをしていたのは、とんでもない間違いであったのかもしれません。他の業種でそんな割りのよい話はないわけで、受験料収入が減り始め、入試とか広報の費用すら受験料収入では賄えないようになります。

また、大学関係団体が大学のために何をしてきたのかということも問題です。高等学校における高等学校長会は、圧力団体としての機能を果たし、発言力も強いわけです。ところが、大学関係団体は、国に補助金を要求するという時にしか団結しませんし、国立大学協会と私立大学関係団体が一緒になって行動するということは極めて少ない。どうして、この市場が崩れようとしている時に、各大学のパニックをクーリングアウトして、調整していこうということをしないのでしょうか。自由競争、規制緩和の時代だから、何でもやれるというのは強者が生存するための論理でしかないということでしょう。

ユニバーサル状況下の中、いまだに偏差値という評価尺度が受験にあたって有効に機能するような、2割程度しかない“強者”と言える大学が、仮に推薦入試の定員比率も高等学校のご自由にと、際限なく自由競争をやり始めたらどうなるか。アッという間に、大部分の私立大学は倒産していくことでしょう。

また、状況変化を示す指標としてもう一つ付け加えておくならば、平成11年に受験産業がまとめた偏差値を見ると、正規分布をしていません。いわゆる“ふたこぶラクダ”（二極分解）の状態になっていますが、これが何を示しているかに気がついている人が、どの程度いるのだろうかということも気になります。

(2) 大学全体の姿勢・節度がどこまで機能するか？

～“評判”に向けて、今やみくもに競争原理を追求することが正しいのか？～

これからの問題としては、大学全体の姿勢や節度がどこまで機能するのかということが重要です。大学の評判を上げようと、現段階で各大学がやみくもに競争原理を追求することだけが本当に正しいのでしょうか。

例えば、高等学校と大学のアーティキュレーションの問題を考えてみてもわかると思いますが、高等学校までの“ゆとり”の教育を受けて、大学は出口管理が求められる。こんな割りの悪い話に、世論は全然味方をしてくれませんし、大学関係者は黙って聞いている。これは大学自身の首を絞めるような話であると思います。

また、ユニバーサル化で指摘されている学生の学力低下の問題にも関係しますが、大学入学資格試験を中央教育審議会答申では取り上げていますが、このような制度を設けても、試験の不合格者を推薦で入学させる大学は必ず出てくるわけです。そのようなことでは、何の対応にもなら

ないということに気がついていません。大学へ行けば、立派な人間になるとか、これからの人生によいことがあるという“信仰”自体が崩壊する可能性が、十分にありえます。

したがって、競争原理の追求だけでは駄目であろうと思います。市場の適正化、評価者や消費者の健全育成とでも言いましょうか、これまでもお話してきた通り、大学の入り口の市場は非常に未成熟だというふうに考えざるをえない。それは、大学の教育効果が見えにくかったということもあると思いますが、そのような点では、受験産業を含めて今まで大学関係者が問題を先送りにしてきたツケではないのでしょうか。

(3) 「大学の評判」に対する理性・公正さ・客観性の注入の必要性

とりあえず、私自身は大学の評判に対する理性や公正さ、客観性といったものをあらゆる場で知らしめていくための努力をしていきたい、まずはそこから始めたいと考えています。

最後に、このような機会を今回お与えいただきました筑波大学大学研究センターの山本センター長にもお願いしたいのですが、マスコミ関係者をもっと呼んでいただいて私たち大学教育や高等教育研究に携わる者が情報発信していかなければいけない。やはり、マスコミや世論ももう少しマチュアーになってもらわないと、個々の大学のみならず大学全体の改革努力を理解していただけないし、ひいては大学がいかに社会的評判を上げていくか、その尺度設定すらできないのではないかと感じておりますことを、まとめとして述べ、私の話を終わらせていただきます。

①『現役大学生の志望校選定の理由』

	全体	男子		女子		文科系		理科系	
1位	社会的評価の高さ	社会的評価	35.6%	伝統あり	32.0	社会的評価	35.9	施設設備	28.4
2位	伝統	大都市立地	27.3	社会的評価	25.5	伝統あり	32.1	社会的評価	26.4
3位	大都市部に立地	伝統あり	25.5	施設設備	22.5	大都市立地	28.6	伝統あり	23.0
4位	充実した施設設備	施設設備	20.4	推薦入学	21.5	推薦入学	21.7	学費安い	22.3
5位	推薦入学あり	就職に有利	20.0	大都市立地	20.0	施設設備	16.9	就職に有利	20.3
6位	就職に有利	推薦入学	16.4	学費安い	16.0	就職に有利	16.2	大都市立地	18.2
7位	学費安い	学費安い	16.0	その他	15.5	校風に特色	15.5	推薦入学	14.9
8位	校風に特色	校風に特色	12.4	就職に有利	12.5	学費安い	12.1	その他	9.5
		その他	7.6	カリキュラム充実	12.0	その他	11.0	カリキュラム充実	8.8
		スポーツ文化活動盛ん	6.2	校風に特色	10.5	教授陣充実	8.3	特色ある受験制度	8.1
		教授陣充実	5.8	教授陣充実	8.5	カリキュラム充実	6.9	スポーツ文化活動盛ん	7.4
		特色ある受験制度	5.8	特色ある受験制度	8.5	特色ある受験制度	5.5	校風に特色	6.1
		カリキュラム充実	5.1	少人数教育	5.0	少人数教育	5.2	教授陣充実	4.7
		少人数教育	3.3	スポーツ文化活動盛ん	5.0	スポーツ文化活動盛ん	3.4	少人数教育	1.4

資料：学生情報センター「大学生の進学動機と在籍校の満足度に関する調査」1999年3月
調査対象は首都圏、京阪神、愛知県、広島圏の「学生マンション在住」大学生

② 現在の学校の満足度別・学校選びの際重視した情報

（単位：%）

項目	現在の学校の満足度（100点満点）	大学生				短期大学生				専門学校生			
		全体	～40	～70	～100	全体	～40	～70	～100	全体	～40	～70	～100
学校概要	募集学部・学科(コース)・定員	65.8	66.7	65.1	66.1	60.2	62.5	66.7	56.4	52.1	62.5	63.2	45.7
	初年度納入金	23.7	22.2	32.6	17.7	35.5	37.5	36.7	34.5	56.2	75.0	57.9	52.2
	沿革	2.6	—	2.3	3.2	1.1	—	3.3	—	—	—	—	—
	建学時の精神	0.9	—	—	1.6	2.2	—	3.3	1.8	1.4	—	—	2.2
	知名度・伝統	17.5	22.2	11.6	21.0	22.6	50.0	13.3	23.6	16.4	12.5	15.8	17.4
	校風	15.8	11.1	11.6	19.4	11.8	—	13.3	12.7	16.4	12.5	21.1	15.2
制度	校舎などの設備	27.2	11.1	23.3	32.3	38.7	37.5	50.0	32.7	35.6	—	42.1	39.1
	留学制度	11.4	—	9.3	14.5	4.3	—	3.3	5.5	1.4	—	—	2.2
	奨学金制度	7.9	—	14.0	4.8	4.3	—	6.7	3.6	12.3	25.0	21.1	6.5
	短大の編入制度	—	—	—	—	12.9	12.5	16.7	10.9	1.4	—	5.3	—
	専門学校の大学・短大併修制度	1.8	11.1	—	1.6	—	—	—	—	4.1	12.5	—	4.3
	専門学校の大学編入制度	—	—	—	—	1.1	—	3.3	—	—	—	—	—
	学校間の単位互換制度	1.8	11.1	—	1.6	3.2	—	—	5.5	1.4	—	5.3	—
進路	就職指導の内容	17.5	33.3	18.6	14.5	28.0	—	30.0	30.9	31.5	25.0	26.3	34.8
	資格取得の実績	31.6	55.6	30.2	29.0	37.6	25.0	46.7	34.5	35.6	37.5	36.8	34.8
	短大の４大への編入学実績	0.9	—	—	1.6	12.9	25.0	13.3	10.9	—	—	—	—
	就職先実績	35.1	33.3	41.9	30.6	47.3	12.5	46.7	52.7	30.1	37.5	21.1	32.6
	大学院への進学	3.5	—	2.3	4.8	—	—	—	—	—	—	—	—
	中退などの状況	—	—	—	—	—	—	—	—	1.4	—	—	2.2
入試	入試内容	63.2	55.6	60.5	66.1	54.8	50.0	53.3	56.4	49.3	37.5	47.4	52.2
	推薦について	40.4	22.2	30.2	50.0	45.2	37.5	53.3	41.8	34.2	25.0	15.8	43.5
	入試倍率	28.1	33.3	39.5	19.4	31.2	50.0	30.0	29.1	19.2	—	26.3	19.6
	偏差値	55.3	88.9	67.4	41.9	33.3	12.5	30.0	38.2	19.2	25.0	21.1	17.4
学びの内容	カリキュラム(シラバス)	21.1	11.1	16.3	25.8	22.6	25.0	30.0	18.2	35.6	50.0	36.8	32.6
	教授(先生)の充実	5.3	—	7.0	4.8	6.5	—	10.0	5.5	8.2	12.5	10.5	6.5
	学部・学科の詳しい内容	49.1	33.3	30.2	64.5	36.6	12.5	56.7	29.1	30.1	37.5	42.1	23.9
	資格取得のための指導	20.2	33.3	18.6	19.4	22.6	37.5	16.7	23.6	21.9	12.5	15.8	26.1
	授業の充実	11.4	11.1	18.6	6.5	15.1	25.0	16.7	12.7	20.5	50.0	5.3	21.7
	教育施設の充実	14.0	22.2	14.0	12.9	16.1	12.5	20.0	14.5	24.7	25.0	10.5	30.4
その他	所在地	50.9	66.7	46.5	51.6	50.5	62.5	56.7	45.5	64.4	37.5	68.4	67.4
	学生の雰囲気	20.2	11.1	16.3	24.2	17.2	—	23.3	16.4	16.4	—	15.8	19.6
	サークルなどの充実	9.6	—	9.3	11.3	6.5	25.0	6.7	3.6	1.4	—	5.3	—
	男女比率	6.1	—	9.3	4.8	6.5	12.5	10.0	3.6	6.8	12.5	5.3	6.5
	卒業生の入学実績	6.1	11.1	9.3	3.2	11.8	12.5	20.0	7.3	15.1	25.0	21.1	10.9

※青色部分は全体より高い数値を指す。

リクルート『カレッジマネジメント 95』　p16

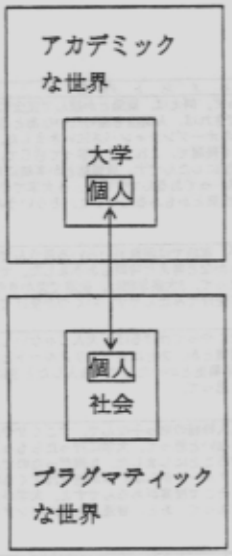
③ 進学先を選ぶ際に卒業生が重視する項目・先生が重視する項目

	卒業生		先生	
大学	1位 学部・学科の詳しい内容	50.0%	1位 入試内容	57.7%
	2位 校舎などの設備	44.7%	2位 就職先実績	50.8%
	3位 所在地	42.1%	3位 推薦について	48.6%
	4位 カリキュラム(シラバス)	41.2%	4位 募集学部・学科・定員	47.9%
	5位 資格取得の実績	39.5%	5位 学部・学科の詳しい内容	45.1%
	5位 資格取得のための指導	39.5%	6位 初年度納入金	39.4%
	7位 就職先実績	36.0%	7位 就職指導の内容	37.8%
	7位 授業の充実	36.0%		
短期大学	1位 就職先実績	44.1%	1位 就職先実績	50.7%
	2位 就職指導の内容	43.1%	2位 推薦について	44.0%
	3位 校舎などの設備	40.9%	3位 入試内容	40.2%
	4位 資格取得の実績	37.6%	4位 募集学部・学科・定員	39.4%
	4位 カリキュラム(シラバス)	37.6%	5位 就職指導の内容	38.0%
	6位 学部・学科の詳しい内容	36.6%	6位 初年度納入金	34.6%
	7位 募集学部・学科・定員	34.4%	7位 学部・学科の詳しい内容	31.4%
	7位 資格取得のための指導	34.4%		
専門学校	1位 初年度納入金	49.3%	1位 就職先実績	52.7%
	2位 資格取得の実績	45.2%	2位 資格取得の実績	45.3%
	3位 就職指導の内容	42.5%	3位 初年度納入金	43.0%
	3位 就職先実績	42.5%	4位 就職指導の内容	42.2%
	3位 カリキュラム(シラバス)	42.5%	5位 資格取得のための指導	34.1%
	6位 学科の詳しい内容	35.6%	6位 募集学科・コース定員	30.6%
	7位 資格取得のための指導	34.2%	7位 校舎などの施設	28.1%

＊卒業生のデータは「現在選ぶとしたら」で回答してもらった数字。

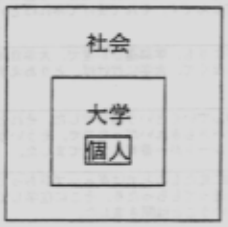
リクルート『カレッジマネジメント95』 p14

④ 従来型の大学と社会の位置づけ

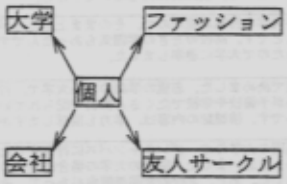


個人は２つの世界（大学と社会）を意識する

⑤ ユニバーサル化した段階の大学と社会の位置づけ



a．個人と大学は共に
同じ１つの世界（社会）
に存在する



b．社会の中で大学は選択肢の一つ

③④は西道実・濱名陽子・広沢俊宗「ユニバーサル高等教育段階における
大学の魅力の構造ーフォーカスインタビューによる魅力要因の探索的検討ー」
日本高等教育学会第２回大会配付資料より　99.5

⑥ 大学生フォーカスインタビュー結果(1)

〔進学と大学選択の理由〕

Group	コメント内容
A 偏差値上位校 3年生	世の中のことについて，自分は分かっていないなあと思って，例えば，新聞とか読んで完全に理解できることってないじゃないですか，文章とかが難単でも，で，世の中について全然わからないし，できれば，人間性も深めたいなあと思って，それと，高校が進学校だったので，あまり進学については，疑問を感じなかったです。ABCDとE大学のオープンキャンパスにいきました，英語が好きだったんで E大に行こうと思ってたんですけど，前日にB大に行ったんです，そしたら，すっごく綺麗で，これこそ大学って感じで，次の日に行ったE大は，なんかかさくてコンクリート造りで，思っていたのと違っていたので，B大を志望校にしたんです，情報誌とか事前に見てました，資料請求をしてそれからオープンキャンパスに行って，そのあともう一回予備校で「ABCD模試」ってあるんですけど，各大学でやるんですよ，で，それで各大学をまわって，最終的にB大に決めました，オープンキャンパスとかで，模擬授業とかもあるんですよ，そういうので，あとは大学の情報誌を読んで。
	友達と話をしていて，進学のほうに行きたかったんですが，家族では両親がいろいろ言うんですよ，父親は社会関係，母親は文学部に行ったらいいと，僕は歴史も好きだったんで，考古のほうに行こうかなと考えた時期もありました。でも，家族の話は，アドバイスとまではいえないレベルです。前期試験全滅したんです，それであせってしまって，B大奈学部は，後期で受かりやすいってみんなに言われていて，それで二浪するわけにもいかないし，とにかく受けてみろって言われて受けてみたんです。いくつか受けてみて，で受かったところで一番良いなと思ったので。
	就職しても良かったんですけど，まだ社会に出て人とうまくやって行けるほど大人じゃないし，もうちょっと自分のやりたいことを勉強したかったので，進学を選びました，予備校の先生とかからの情報とか，あとはさっきリクルートとか言ってましたけど，あれについている資料請求のハガキで請求したり，あとは近所の人がちょうど G大の卒業生とかいたんで，遊人したときにアドバイスとかしてもらって，その人が人間的にも良い人なんで一緒の大学に行ったら近くなれるかなと思って。
	高校の国語の先生になりたいという夢があるんですが，三人姉妹の末っ子なんで，すごく甘やかされて育ってきて，社会のことを全然わかってないので，そういう自分がこのまま教える人になれるわけないと思って，大学に行ったらもっと視野が広がると思って，自立とまではいかないけど，自立するための勉強ならできると思ったので進学することにしました，九州だったので，地元なら，友達や先輩，先生から聞きますが，関西や東京だとそういう情報はないんです。それで，リクルートから厚い本が送られてくるので，それを見たり，あと予備校にある情報とか見ました，高校3年の時，夜に予備校に行ってたんです，そこで授業があるんですよ，大学がどんな感じかっていう，情報誌は，リクルートが一番見やすかったです，試験日とか，科目とか全部書いてあって，あと，普通の大学のパンフレットは良いことばかり書いてあるので，そういう第三者的なものから選びました。
	大学のイメージってあるじゃないですか，遊べたり，それと，一応就職も考えたんですけど，やりたい仕事が見つからないんで，4年間でやりたい仕事がみつけられたらと，あと，友達とかも作りたいなとも思ったんで大学に行きました，姉の交友関係がすごく広いんで，その友達から話を聞きました，あと，部活やってたんで，先輩からも話を聞きました，関西の大学だけなら，先輩の話だけでイメージできるんですが，東京の大学は，パンフレットを送ってくれるので，そういうもので，こういう所なんだなあと，イメージを思い浮かべます，情報誌の受験要項欄で，試験科目は見てましたけど，その大学が何をしているのかはパンフレットのほうが充実していると思ったので，そっちを読んでいました，大学の紹介を見るのが好きだったんで，他にもいろんなのを見ました，本当は実力もないのに東京のほうの大学に行きたいと思ってたんですよ，ちょっと10月ぐらいに母が事故にあってしまって，寝たきりの状態になってしまって，父が単身赴任なんで，姉が一人外に出てるんで母の看病をする人がいないので，しょうがないから大学いくのやめようと思って，浪人するつもりだったんですけど，直前になって怖くなって指定校推薦でC大受けたんですけど，C大だったら家から近いし，週末もたまに帰ってたりしてるんですけど，大丈夫かなと思って，ほんとにC大を第一希望できている人には申し訳ないんですけどそういう感じで来てしまって，ぜんぜんC大の生活に期待していなかったぶん，生活も充実してるぶん，ほんとに来て良かったと今は思ってます。
B 偏差値上位校 1年生	進学しか考えていなかった，高校自体が 100パーセント進学という高校だったので，他の道はまったく考えられない状態でした，確かに，短大に行くとか専門学校に行く子もいたけど，ただ単にプライドがあって，自分の中では大学生になるのが当たり前のコースとして描かれていたから，別に何の迷いもなく，大学に行くことにしました。
	やはり高校の雰囲気ですね，高校卒業しての就職の道というのは頭になかったです，大学を決めた理由は，ブリーに入りたいからということになりますね，一応，関西では有名なんで，それで決めたという感じですね，ここじゃないとあかんというのがありますね，それと，キリスト教系の高校だったので，それ系で家から通えるということ，ただし，高校が進学校なので，その流れで大学進学は，高校に入った時点で決まっていたと思います。
	高校のときには何も考えてなくて，別にしたいこともなかったし，何となく行こうと思って，大学に行ったという感じです，したいことをゆっくり考えられると思ったので，ただ何となくですかね，知名度かな，両親の出身校なんで，それで受けてみればというので，ええ学校やでというぐらいで，別に特に何もないですけど。
	高校が大学の付属高校なので，そのまま上がるのが定石でした，そのため，大学選びよりも，学部選びが主で，大学自体はそこしかなかったということです，高校のときの雰囲気もあったんですけれども，したいことが見つからなくて，大学に行けば，とりあえず広く門が開かれるかなと思ったので大学に進学しました。
	偏差値で決めました，志望の学部のある大学で，行きたいと思う中から，偏差値で選んでいくという感じでした，それと，関西で通える範囲で，資料が予備校や学校でたくさん無料で配られていて，それを見て，それと，キャンパスもきれいだったので，そういう魅力も含まれていたと思うんです，情報誌の内容は，学力も関係しますから，ABCDしか見ていないです，リクルートが一番有名で見てました。
	地元福岡の大学のオープンキャンパスに行きましたが，イメージしていたものと実際に見たものとではギャップがあって，「ああ私，ここには行かん」と思いました，関西の大学の場合は来るのが大変ですから，パンフレットを送ってもらったり，そこに在学している従兄弟に電話して聞きました，あと，学校の合同説明会があって，それに行って，勉強の仕方とかそういうことは聞きました。
C 偏差値下位校 3年生	遊べると思ったから，女子校だったんで，みんな女同士に慣れているから，女子短大に行ったり女子大に行く子が多かったので，私も女子大に行きたくて，友達同士で話してて，雰囲気な大学はここだという感じで，でも，受けたところが短大だったから，2年間しか遊べないのと4年間遊べるのだったら，やはり4年間と思って，先生がここにあるよと教えてくれたから，じゃ受けようということで。
	関西の通える大学にしなさいと親に言われて，今の学校を選びました，遠くの大学に行くつもりはなく，関西だけということで，高校にある資料で結構わかりました。
	高校卒業して，就職も考えたんですけれど，何がしたいのか全然見えなくて，1年浪人して，とりあえず考える時間がほしいという感じで受験しました，いろいろな大学を受けたんですけれども，結局，ここしか受からなかったので。
	高校が大学の付属なんです，大学に行くのが雰囲気的に当たり前みたいな感じで，就職する人は全然いないし，親も高校に入るときから上がるのは決めていたので，何も深く悩むこともなく上がったという感じです，内部進学なんで，先輩の話が一番大きいです，あまり勉強を好きな方じゃなかったので，それでかな。
	高校時代に進路相談室に来る資料を見ました，担任からは受かる大学を薦められましたが，自分では志望校を決めてましたから，それを担否して，1年間浪人という形で新聞配りながら予備校に通って，合格ラインを完全に超えたという保証をもらいましたので，それで受験しました。
	大学のオープンキャンパスに行きました，行ったときは休み中で学生が全然いなかったので，雰囲気は全然わからずに，一人で行ったから資料をもらって逃げ帰って，あまりいい印象はなかったです，それが今行っている大学です，情報誌は，『進研ゼミ』と『学習時代』が学校に置いてあったので，それを見ました，私は普通の受験勉強が苦手で文章を書くことが好きだったから，推薦入試の論文で受かったんですけれども，そっちの方で探して。

表⑥⑦の出典は④⑤と同じ

⑦大学生フォーカスインタビュー結果(2)

〔現在の大学〕

cat.	内容	Group
施設・環境	○ パソコンの設備がある程度整っている。	A
	○ 憩いの場がある，中央芝生がよい	A
	○ 広い	A
	○ 設備がいい	A
	○ 各学部ごとに食堂がある	A
	○ 校舎がスパニッシュ瓦を使っていてきれい	A
	○ 融通が利く	B
	○ コンピューターの普及率が高い	B
	○ 校舎がきれい	C
	○ 景色がきれい	C
	○ キャンパスきれい	C
	● 人数の割に狭い	B
	● 広すぎる	A
	● 憩いの場が少ない	A
	● ワイヤレスマイクの感度が悪い	A
	● 掲示板が１カ所しかない	C
	● 校舎の配置が悪い	C
	● 閉ざされた感じ	C
	● 食堂の地校計画があやふや	C
立地・通学	○ キャンパスが離れていることで新鮮	B
	○ 大学前通りきれい	B
	○ 駅から近い	B
	● 生活が不便	A
	● 駅からの道のりが長く坂がすごい（バスは高い）	A
	● 駐車場欲しい	B
	● キャンパスは田舎がほとんど	B
	● キャンパスが離れているので下宿の子は不便	B
	● 駅から遠すぎる	B
	● 車通学が無理	C
	● 駅から遠い	C
	● 大学自体が狭い	C
	● スクールバスの便数が少ない	C
	● 山の上にある	C
	● 車で行けない	C
	● 通学にタクシーを使うと金がかかる	C
	● キャンパスが離れているとクラブ活動をするのに不便	C
	● バスの本数	C
カリキュラム	○ 時間割が自由にとれる	A
	○ 好きな授業をとれる	A
	○ 資格が取れる	B
	○ 英語がしゃべれるようになれるかも	B
	○ 単位がとりやすい	B
	○ 専門別にきっちり分かれている	B
	● １回の一番最初のカリキュラムの組み方が分からなかった	A
	● 単位が１年に取れる数が決まっている（同大）	A
	● 大教室での授業が多い，少人数のクラスがよい	A
	● ９０分授業がつらい	A
	● 単位を取るための勉強になってしまっている	B
	● 取得単位が多い	B
	● 他大学の授業にでても単位がもらえない	C
	● 履修制限がいや	C
	● 夏休みが減った	C
人間関係・交流	○ サークル・クラブがたくさんある	A
	○ 色々な人がいてとてもおもしろい	A
	○ 交友関係が広まる	A
	○ コンパで友人ができる	B
	○ 男女の比率がいい	B
	○ 同じ大学卒というだけで相談に乗ってくれる（ＯＢ・ＯＧ）	B
	○ 女性が８５％以上	C
	○ 倫理学の教授がいい人	C
	● 内部生が多すぎる	B
	● 留学生が多い割に交流する機会がほとんどない	B
	● 他大学との交流が少ない	C
	● 学祭の参加率が低い	C
	● 先輩との交流が少ない	C
	● 卒業しても友達でいられる人が少ない	C
	● 気の合う人が少ない	C
就職	○ ガイダンス多い	A
	○ 企業に先輩が多い	A
	○ 就職の対策ができる	A
	○ ネームバリューある	B
	○ 大卒のほうが給料いい	B
	○ 就職率がいい，しやすいと思われている	B
	○ 情報多い	C
	● ４年制大学卒女子の就職厳しい	B
	● フリーターになりそうな子が多い	B
	● 就職以外の進路を選ぶ人が増えている	B
	● １，２回生まで情報がまわってこない	C
	● 大学名で選ばれる就職	C
	● 就職するのに大学のネームバリューが邪魔	C
	● 就職は自力で	C

cat.	内容	Group
授業	○ フリーな内容	A
	○ 授業が適当	A
	○ 週に１回ネイティブの先生の授業がある	A
	○ 授業での工夫が見られる	B
	○ 出席に甘い	B
	○ 教養と専門は出席ほとんどなし	B
	● 期待はずれの授業が多い	B
	● 授業がつまらない（大人数のため）	A
	● 専門すぎて息苦しい	B
	● 実験レポートが少し辛い	B
	● 先生の話が聞き取りにくい	C
	● 勉強・興味の持てる授業がない	C
食堂	○ ご飯がおいしい	A
	○ 学食おいしい	B
	○ カレーがおいしい	C
	● 食堂の味に差があり，混んでいる所と空いている所がある	A
	● 学食まずい・品数少ない	C
	● 狭い食堂	C
	● 食堂のメニューが少ない	C
	● 食堂のメシがまずい	C
教員	○ 個人的につきあってくれる先生がいる	A
	● 教授の研究内容が見えてこない	C
	● 教育じゃなくて研究しかしていない先生がいる	A
	● 同じ授業・単位でも担当の先生によって評価も内容も異なる	B
	● 教授は自分の都合で休む	B
	● ゼミの先生以外触れあいなし	B
	● 教授に熱意ない	B
イメージ	○ 明るい	A
	○ 素直に楽しめる	A
	○ 適当に選んでいる	A
	○ ステイタス	B
	○ 心のゆとり	B
	● ネームバリューに頼りすぎ	A
	● たるむ	A
モラル	● 携帯電話が授業中に良くなる	C
	● 勉強をしに来ている人が少ない	C
	● 規則を守らない	C
	● 喫煙者が多い	C
	● 学生の授業態度が悪い	C
	● ゴミ箱にゴミを捨てない	C
学費	○ 奨学金制度	A
	● 学費が高い	A
	● 授業料高い，１コマに直すといくらくらいになるだろうか？	B
	● 学費が高い	C
事務	● 連絡が遅い	C
	● 学内での活動が自由にできない	C
	● 書類多発	C
その他	○ 学生の自主性が尊重されている	A
	○ 卒業後に教会で結婚式ができる	A
	○ 家庭教師に強い	B
	● 武闘派がいる	B
	● 宗教団体がいる	B
	● 中途者が多い	C
	● クラブが弱い	C
	● 学祭が地味	C
	● イベントが少ない	C

○は肯定的な評価，●は否定的な評価を示す。

A：偏差値上位校３年生

B：偏差値上位校１年生

C：偏差値下位校３年生